

ALADJINを聴覚障害教育の  
領域から読み解く  
— 手話学の立場から —

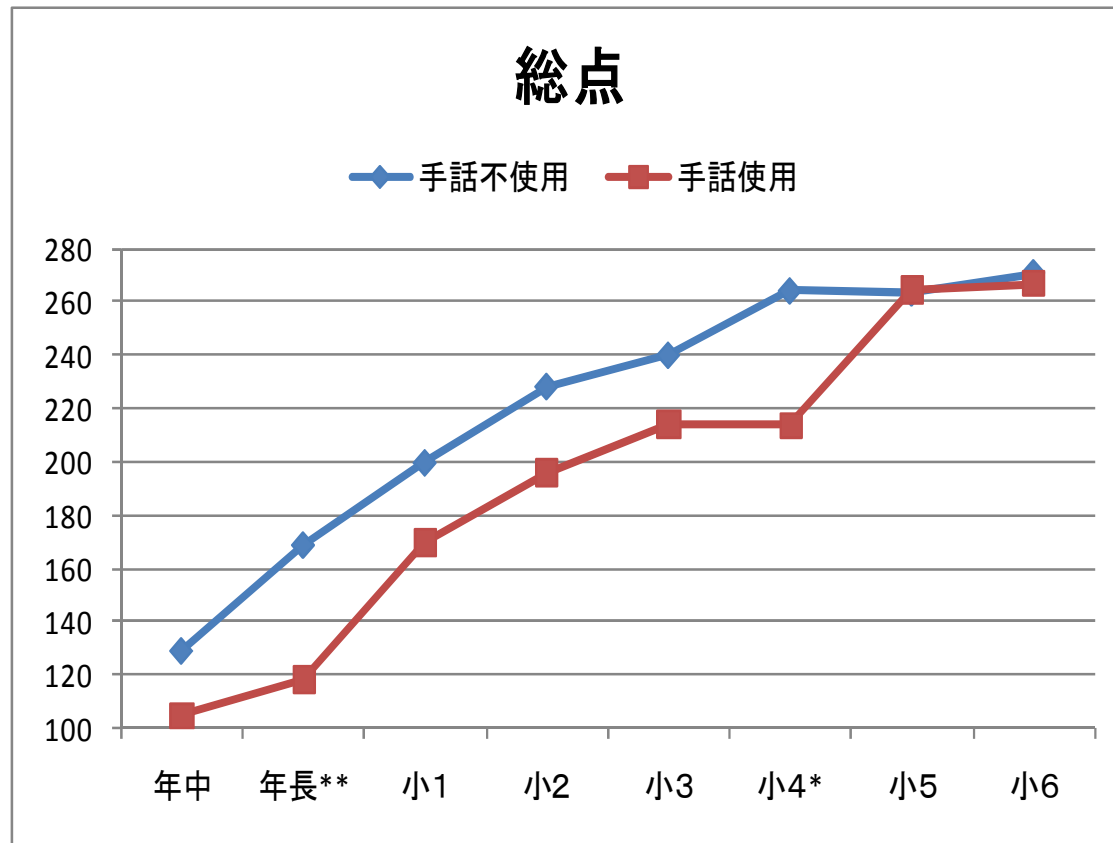
武居 渡

(金沢大学 人間社会研究域 学校教育系)

# 感覚器障害戦略研究の結果の概略 — 手話という視点から —

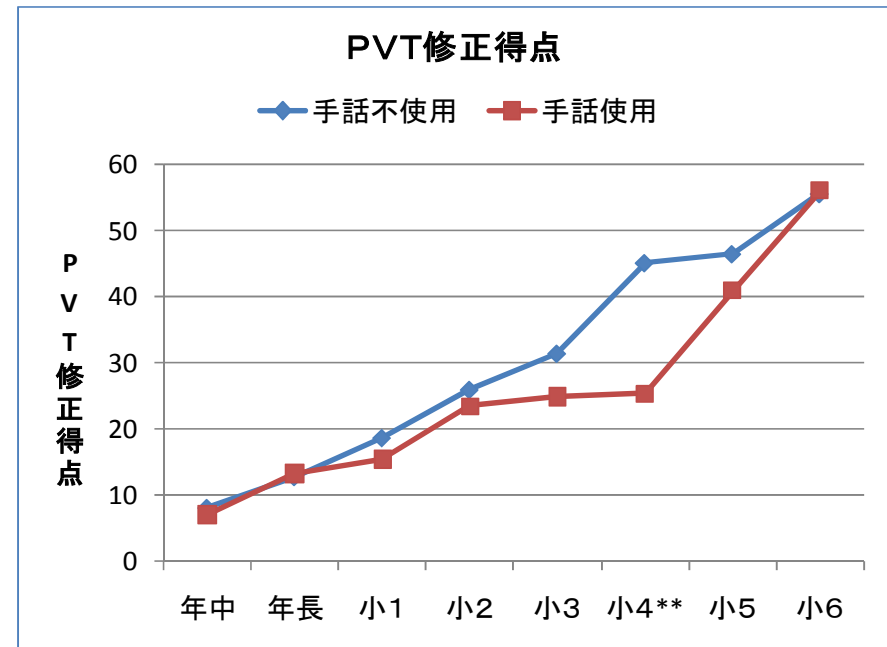
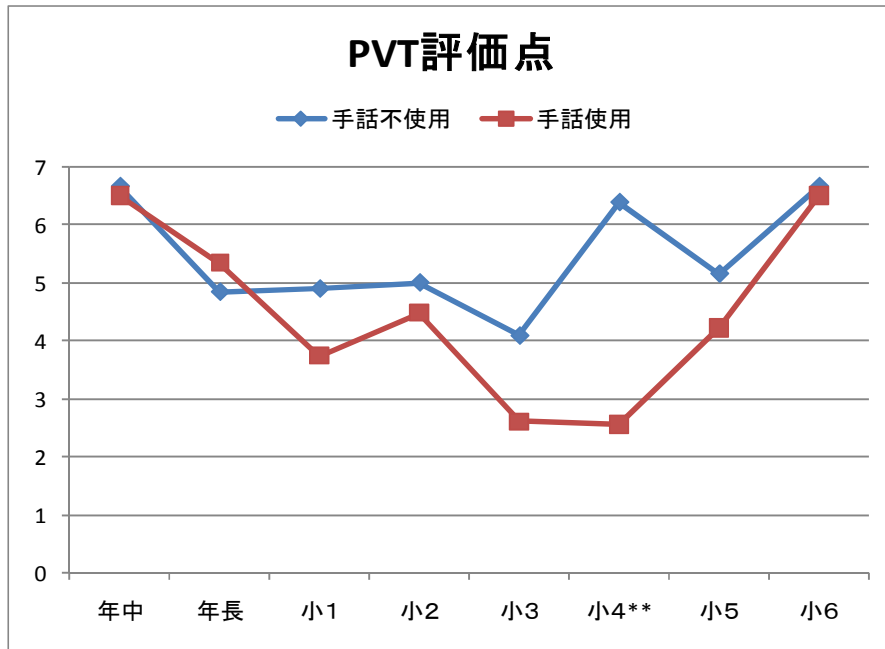
- 全体の3分の1が手話使用児。3分の2が音声使用児。
- どの言語ドメインの検査スコアにおいても  
**手話使用児 < 音声使用児**  
→ ただし各年齢で比較すると2群間で統計的な有意差はほとんどない。
- 小6でおおよそキャッチアップ。  
→ ただし本当にキャッチアップしているのかは要検討。

# 質問応答関係検査 (総点の発達的变化)



- 小4までは手話使用群が50点ほど遅れる。  
(有意差があったのは年長と小4)
- 小5で追いつき、それ以降は差がなくなる。  
→ 天井効果?  
→ 手話使用児がキャッチアップしたのか?

# PVT発達的变化



- ・小4で手話使用群と手話不使用群で有意差あり。
- ・小4以外は、手話使用者と手話不使用者で有意な差はなかった。
- ・定型発達児の語彙力と比較すると、聴覚障害児の語彙力は、使用モダリティにかかわらず、平均点でも1SDから2SDは下回っている。

# 結果の解釈について考えるべき事項

- 検査結果が **手話使用児 < 音声使用児** だから **音声で指導する方が効果が高い** わけではない。
  - 音声のみではコミュニケーションがうまくとれず、言語指導が困難なため、結果的に学年が上がってから手話を使用するようになった事例。逆はおそらくない。
  - そもそも手話を確実に習得し、その力を使って日本語の指導を行うことを考えているため、日本語の習得は音声使用者に比べると遅れる。最終的な言語的所産がどうなのかを見ていく必要がある。
- コミュニケーションの評価・・・**質問－応答関係検査**
  - この検査の下位検査の中には、**コミュニケーションモードの影響を受けにくい検査**と**日本語の知識を求められる検査**があるため、純粹にコミュニケーション力を評価しているのではなく、日本語の知識についても測定していることになる。

# 戦略研究で扱うことができなかった課題

- **手話の評価**

- 疫学研究に耐えられる検査がない。

- 手話についても言語ドメイン別に評価できることが望ましい。

- cf. 日本手話文法理解テスト

- **手話使用児の今後の指導方針を考える上で**

- 手話の力が十分ついているのであれば、手話の力を使って、日本語の指導を考えられる。


- 手話の力さえ十分でない場合は、手話環境や手話でコミュニケーションを深める指導をもっとしていくことが日本語の力につながる。

# 聞こえない子どもたちの幸せに必要なのは言語力だけなのか。

高い日本語力は、聞こえない子どものQOLを高めるが、高い日本語力だけで聞こえない子どもが幸せに生きられるわけではない。

- かつての口話法によって高い学力や日本語力を得た人が、アイデンティティの危機を経験し、手話を学ぶことで、ろう者としての新たな自分を発見する。

→ 「聞こえなさ」や「ろう」を自分でどうとらえるか？



「障害認識」や「デフ・アイデンティティ」という視点

# マイノリティの アイデンティティ獲得段階 Glickman (1996) より

第1段階: 他者の価値観を無条件に受け入れる段階

第2段階: 努力してもマジョリティになれず、  
混乱している段階

第3段階: 新しい価値を発見し、それに傾倒する段階

第4段階: 両者の価値をバランスよく内在化させる段階



手話やろう者の文化を発見  
聴者の文化や価値、音声言語を否定  
ろう者以外には攻撃的になる

# アイの アイ獲得段階

第1段階

ろうであることに否定的な感情を持つ

入れる段階

第2段階

聞こえることに最上の価値を置く  
「1- $\alpha$ 」の自分

持っている段階

第3段階

ろう者、聴者の両方に親しい友人  
両者の文化の違いを理解  
両者の文化を肯定的に受容

傾倒する段階

第4段階: 両者の価値を

自分が何者なのかわからず混乱  
ろう者でも聴者でもない

# 手話使用児のアイデンティティ

- ろう児のアイデンティティに関する多くの研究

Schowe (1979) Identity Crisis in Deafness

## 3つの適応パターン

- 1) ろう者社会に傾倒し、聴者社会を否定
- 2) 聴者社会にあこがれ、ろう者社会を否定
- 3) 両方の世界で楽しく過ごすことができる。

Carty (1994)

ろう者のアイデンティティを6つの段階で説明

Glickman (1996) 言語的マイノリティグループをもとに、  
ろう者のアイデンティティを説明

# 口話で生活するろう者の アイデンティティ

河崎(2004, 2008)

- 低い自己肯定感と不安定な自己認識
  - アンビバレントな感情
  - 圧倒的な聴者社会に接してアイデンティティの危機を迎える
- 当時のろう教育のなかでは、成人後のアイデンティティの確立という視点がなかった。
- 手話に出会うことでろう者社会を発見し、そこに帰属意識をもつことで、アイデンティティを再確立する。

口話で生活するろう者のアイデンティティは存在しないのか？  
人工内耳装用児のアイデンティティに手話は必要か？

# 人工内耳装用児の アイデンティティをどう考えるか

Wheeler, Archbold, Gregory and Skipp (2007) より

- 人工内耳により、聴者とのコミュニケーションはかなりスムーズに。
- 手話と音声を場に応じて使い分け。
- ただし、クラス内や会議などでは完全に聞こえているわけではない。
- 緩やかなろう者アイデンティティ。

戦略研究をふまえた次のステップとして

- ※ AVTによる指導やろう児の正常化論の中で育つ人工内耳装用児がどのように自己確立していくのか。
- ※ 手話に頼らないアイデンティティは存在するのか？